

明治期に渡米した房総アワビ漁師たちの源流

～小谷源之助・仲治郎兄弟と金澤屋の人びと～

NPO 法人安房文化遺産フォーラム 愛沢 伸雄
(房総アワビ移民研究所 研究チーム)

0. はじめに	1
1. 明治の長尾村根本	2
2. 海産物問屋・金澤屋と『長尾村誌』	5
3. 根本で始まった潜水器採鮑漁と森一族	7
4. 「慶應幼稚舎」で学ぶ源之助と横浜・清水屋	10
5. 乾鮑製造と小浜「器械根」の採鮑漁	14
6. 清国との海産物貿易と水産伝習所創設	18
7. 金澤屋と海産物商人～萬屋・伊豆屋・石福	21
8. 水産伝習所で学ぶ仲治郎～明治 23-24 年	25
9. 金澤屋を支えていた人びと	30
10. 佐渡の森知幾と源之助の活躍	37
11. 源之助の「逃亡」事件とよばれた出来事	42
12. 磯焼けと根本での調査・「あわび研究」	45
13. 源之助・仲治郎兄弟が渡米にいたるまで	48
14. 金澤屋の女性たち	53
15. 明治女学校のひでと画家倉田白羊	61
16. 清三郎の死去と仲治郎	65

0. はじめに

1897（明治30）年、安房郡長尾村根本（南房総市白浜町）出身の小谷源之助・仲治郎兄弟をリーダーとする鮑漁師らは、米国カリフォルニア・モンレー湾域で器械式潜水具を導入し、採鮑業に従事した。渡米時、兄は30歳で弟は25歳であった。二人は採鮑事業だけでなく実業家のA. M. アーレンと共同して缶詰会社を設立し、鮑加工事業を始める。渡米まで兄弟は、根本で父清三郎・母たよが経営する海産物問屋「金澤屋」で働いていた。どのような経緯で渡米するに至ったかは十分には解明されていない。

また、弟の仲治郎は米国で10年を過ごした後、1906（明治39）年に帰国し、七浦村千田（南房総市千倉町）に暮らしながら、千田漁業組合長や安房水産会長、七浦尋常小学校の学務委員などの要職を歴任し、地元で潜水士を養成して米国の兄源之助のもとへ送り込んでいった。ただ、このこともあまり知られていないだけでなく、安房の水産界では、小谷仲治郎の果たした役割が大きかったわりに、戦時中に亡くなったこともあり、ほとんど顕彰されてこなかった人物である。

渡米した鮑漁師の痕跡については、日本側で大場俊雄氏、アメリカ側でサンディ・ライドン氏などが長い年月にわたり源之助・仲治郎兄弟をはじめ房総の漁師たちの調査研究をし、日米交流の事実を明らかにしてきた。ただ、日本側での源之助・仲治郎兄弟に関わる資料が少なく、二人の両親や金澤屋のことは墓石以外わからないまま、今日まで月日は流れてきた。

1914（大正3）年5月8日に仲治郎が新築した居宅の『新築上棟式日誌』があり、帰国後7年暮らしていた仮住まいから新住居となった。『日誌』には42歳の仲治郎が関わった人びとの名が連なり、どのような人脈のもと地域で過ごしていたかを知ることができる。この頃、父清三郎の願いから引き継いだ「根本と布良の海岸線境界問題」は、仲治郎が根本側原告の中心となって行政裁判に臨み、根本側が願っていた方向で裁決されていく見通しが立った時期であったと思われる。仲治郎が難しい裁判に立ち向かえたのも、渡米し現地での困難な事業を乗り越えてきた経験が生かされたといえた。

なお、仲治郎は21歳で千田の平野家に婿養子となったが、渡米前に縁組解消して小谷姓に戻っている。長男の義雄は平野姓を継いだこともあり、平野家は家系として続いている。2019年、仲治郎の旧宅を解体することになり、現在の所有者である平野家の子孫から家屋内の資料などを調査する承諾を得た。その際に襖を丁寧に剥がしたところ、下張りに使っていた大量の古文書を発見したそれらは千切られた書簡や勘定書、契約書の断片であり、大半は実家の海産物問屋「金澤屋」に関わり明治期に書かれたものであった。

これらの資料は「平野家文書」と称し、その調査研究は、まず多くの書簡を紙質や筆跡ごとに分類し、検討して断片を繋げていく作業であった。次に、明治期の難解な崩し字もあるものを解読し、書き下し文にする作業など、その準備は長期間にわたった。大型台風や新型コロナウイルス感染症の拡大を乗り越えて3年にわたり、調査分類が完了した古文書は530枚にのぼる。

安房地域において、明治期を中心に一つの家族の歴史に関わる書簡類が、これほど数多く見つかったのは極めて珍しいという。「平野家文書」の歴史的な事実を安房の地域史に生かす調査研究は、長い年月がかかるであろう。本報告は部分的で限られた内容であるが、その第一歩にしていきたいと思っている。